



西山荘

西山御殿のこと

幕府より隠居を許された二代藩主光圀公は兄の子、綱條公を三代藩主とし、自ら水戸城の北に位置する佐竹家ゆかりの常陸太田を隠居の地と定めます。光圀公が元禄四年（一六九一）五月九日から元禄十三年（一七〇〇）十二月六日に亡くなるまでの十年間を過ごされた隠居所・西山荘は「西山御殿」と呼ばれました。

華美を嫌った光圀公は、隠居の際に諸方から贈られた調度を一切西山荘に持ち込まず、わずかな身の回りの品と修史・編纂事業（その書名は、光圀公の没後、綱條公により『大日本史』と命名されました）に必要な沢山の書物を運ばせたと伝えられています。領民たちと自ら親しく交流しながら、修史・編纂事業に情熱を注ぎ、元禄十三年（一七〇〇）七十三歳で亡くなりました。

西山御殿は光圀公の亡くなった後も歴代藩主によって大切に保存され、宝永二年（二七〇五）には西山の長屋（御殿に仕えた人々の住居）は江戸の水戸藩駒込別邸に移築されました。しかし文化十四年（一八一七）野火により西山御殿は焼失します。現在の建物は文政二年（二八一九）八代藩主齊脩公によって規模を縮小して再建されたものです。現存する御殿の広さは、約百三十九㎡（約四十二坪）ですが、創建当時は現存部分の約三倍の規模でした。

再建された西山荘には「西山守護」と呼ばれる武士がおかれ、御殿裏に建てられた別棟「守護宅」に居住しました。

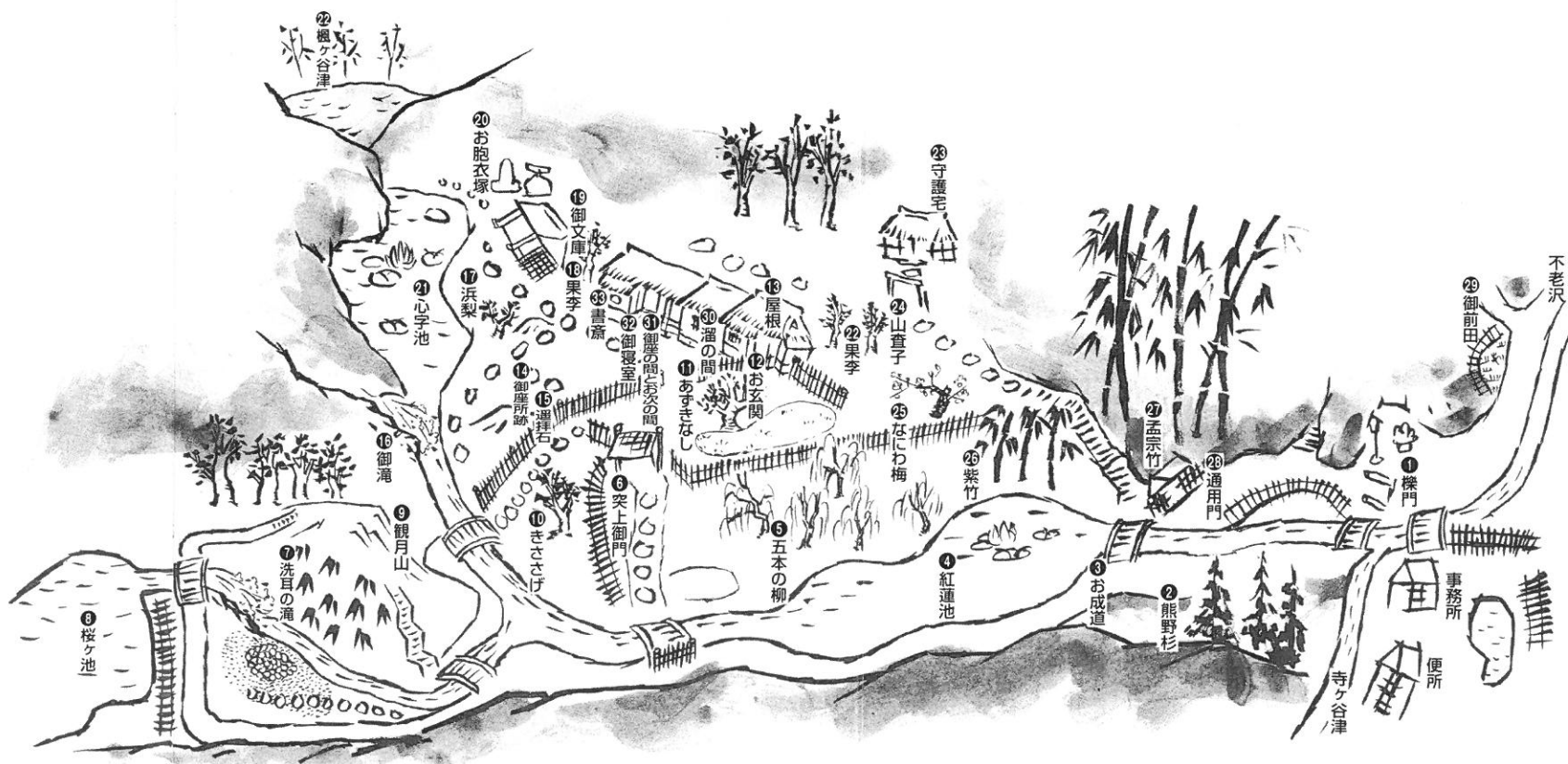
十三代当主公爵閑順公は昭和四十二年（一九六七）西山荘の建物と土地等を寄附し、公益財団法人徳川ミュージアム（旧・財団法人水府明徳会）を設立されました。周辺の山林を含め約一八万七千㎡（約五万七千坪）を保存公開しています。さらに昭和四十九年（一九七四）、西山荘は茨城県指定史跡となりました。指定地面積は約一四万一千㎡（約四万三千坪）です。平成二十年（二〇〇八）には徳川ミュージアム（旧・彰考館徳川博物館）の分館として博物館法の登録博物館になりました。

- 1 櫓門
- 2 熊野杉
- 3 お成道
- 4 紅蓮池
- 5 五本の柳
- 6 突上御門
- 7 洗耳の滝
- 8 桜ヶ池
- 9 観月山
- 10 きざさげ
- 11 あずきなし
- 12 お玄関
- 13 屋根
- 14 御座所跡
- 15 通拝石
- 16 御滝
- 17 浜梨

櫓の丸太を柱として、自然美を取り入れた簡素なつくりですが、西山荘の正門です。この杉の太木は光圀公が紀州（和歌山県）熊野から取り寄せられたもので樹齢は三百年を超えます。光圀公が常々通られた表道です。ひょうたんの形をしたこの池には光圀公が愛した赤い蓮の花が咲きました。中国の詩人、陶淵明が庭前に五本の柳を植えて、自ら五柳先生と称しました。その節儀をしたい、ここに五本の柳を植えられました。水戸城からの使者などが通った西山荘の表門です。周囲の木立に合わせて光圀公が考案された簡素な門で、昼は扉を突き上げておきます。復旧を完了した「桜ヶ池より落ちる滝を「洗耳の滝」といいます。復旧に当たった、十五代当主が光圀公にちなみ「桃源遺事」よりこの名をとられました。西山からの湧水を湛えている池で、その水は「御前田」の用水に使われています。一帯は、春には山桜が咲き、水鳥が雛を育てています。光圀公は秋には観月の宴を開き、詩歌の会を催し、修史・編纂事業に務めた家臣の労をねぎらわれました。ノウゼンカズラ科、落葉高木。六、七月頃、淡い黄色の内側に紫色の斑点がある花を咲かせます。バラ科、落葉高木。五、六月頃白い小さな花が咲き、秋にあずきのような実がなり、木皮に細い白線が散在するので「はかりのめ」といわれます。六畳敷で入口は一間（一、ハメートル）、片側に雨戸を残し、一本の障子が立てられ、式台もせまく作られています。玄関が高く出ているのは、入室の前にここで、腰をかけて足を洗うためです。屋根はすべて茅葺で、棟上に「いちいづ」（別名しばきり）が植えられました。「いちいづ」が植えられたのは、根張りによって屋根の崩れを防ぎ、葉の萎れによって乾燥を測り、注水などとして火災を予防したのだと伝えられています。昭和四年昭和天皇行幸の時の御座所跡です。光圀公は、毎年元旦に直垂を召され、早朝に京都を遙拝されました。その跡を示す遙拝石です。この滝の水は桜ヶ池より引いてきています。バラ科、落葉低木。茎にはとげがあり、初夏に咲く

- 18 果李
- 19 御文庫
- 20 お胞衣塚
- 21 心字池
- 22 楓ヶ谷津
- 23 守護宅
- 24 山査子
- 25 なにわ梅
- 26 紫竹
- 27 孟宗竹
- 28 通用門
- 29 御前田

美しい紅紫色の花からは香料、根からは染料等がとれ、果実は食料となります。光圀公はこれを海岸砂防用とされました。バラ科、落葉高木。木皮ははがれて、そのあとが雲状になり、三、四月頃に淡紅色の花が咲き、十一月に果実が黄色に熟し、芳香を放ち、ぜんそくの薬となります。御隠居後、光圀公は身の回りの品はほとんど持たず、修史・編纂事業に必要な沢山の書物を西山荘に運ばせました。光圀公のお胞衣を納めてあります。もと水戸棚町三木仁兵衛之次の宅地内にありましたが、鉄道用地になり、明治三十四年ここに移しました。胞衣とは、母体内で胎児をつつんでいたもので、後産のことをいいます。当時は陽に当たらず、人に踏まれない縁の下や墓地に埋めました。別名白蓮池。「人の心は裏からも見よ」との戒めから「心」という文字を裏から見た形に池を掘りました。これは、心を裏側から見ても潔白（正直）な人は、友人に値するという教えです。光圀公はこの池に白蓮をうえ、泥中の君子として、この花を愛されました。心字池の上流にある紅葉に囲まれた谷津です。西山荘を守護した武士たちの家を復元したものです。バラ科、落葉低木。とげがあり四、五月頃に白い花が咲き、実は赤く熟し、心臓病の薬となります。光圀公お手植えの梅です。イネ科、觀賞用で二年目から竹が黒紫色になります。イネ科、多年性常緑竹。中国原産の外來種で、日本にある竹では最も大きいものです。筍は食用になります。茅葺に櫓の丸太を柱とした門で、家臣や近所の領民が出入した西山荘の裏門です。この通用門が表門である突上御門よりも立派に作られていることから、領民たちを大事にされた光圀公の人柄が偲ばれます。光圀公が自ら耕された水田（約五千平方メートル）の一部で、「領民となられた証」として、太田奉行所に十三俵（約七八〇kg）の年貢米を納められました。



公益財団法人 徳川ミュージアム

徳川ミュージアム分館 西山荘

発行日 平成25年9月1日 第5版

著者・発行 公益財団法人徳川ミュージアム

理事長 徳川 斉正

〒313-0007 茨城県常陸太田市新宿町590

TEL 0294-7211538

複製及び転載を禁ず

御殿は平成25年7月～平成26年12月まで茨城県指定史跡西山荘災害復旧工事を行っています。

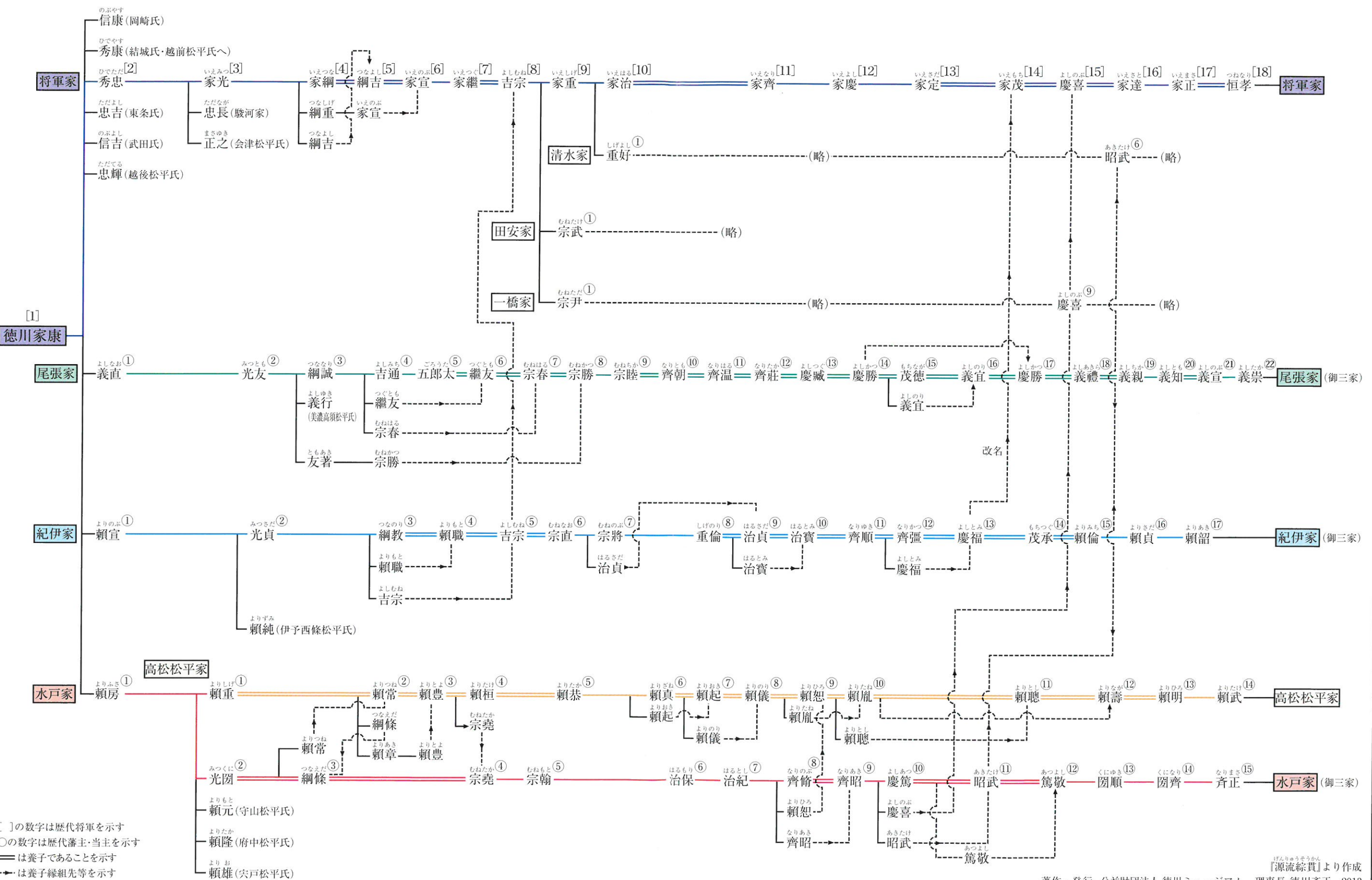
六畳敷で主に城中からの使者や、侍の控室に用いられた部屋です。

御座の間は十の広間で光圀公の居間として使われました。その右側の部屋は、家来が控えるお次の間です。

この二つの部屋の境に敷居が設けられていないのは、士農工商、身分の区別をなく話が出来ようという光圀公の考えから出た設計です。また奥の二段の棚は書棚で、奥の方を低くして沢山の書籍を積み重ねても、崩れたり、倒れたりしないように工夫されています。「なげし」につけてある白い貝は「釘かくし」です。当時大屋敷敷の「釘かくし」は金銀製の御紋付きが一般的でしたが、光圀公は浜辺に散在する貝を用いて簡素の二本を示されました。

光圀公はこの部屋で元禄十三年十二月六日に七十三歳で亡くなりました。元禄四年六十三歳で隠居されてから約十年間ここに住まわれました。丸窓から光を採った三畳の小部屋で、窓ぎわに梅を植えて勉学のいましめとされました。梅は「学問に励めば梅が開く」という故事にちなんで、好文木と称されました。光圀公はここで大日本史の草稿などをご覧になりました。

徳川家系図



[]の数字は歴代将軍を示す
○の数字は歴代藩主・当主を示す
— は養子であることを示す
- - - は養子縁組先等を示す

『源流総貫』より作成
著作・発行 公益財団法人 徳川ミュージアム 理事長 徳川斉正 2013

複製及び転載を禁ず